

赤誠組シリーズまとめ

このまとめは、なぎさGMのシナリオで、アヅマのキョウの都の治安を守る赤誠組が登場するシリーズを扱ったものです。
シリーズは第八話でひとまずの完結を迎えましたが、記録としてこの資料を残します。

赤誠組とは

赤誠組(セキセイグミ)とは、アイヅ藩お預かりの治安維持部隊である。
百姓出身の男たちで結成され(現在は女性の隊士もいる)、結成当初は浪士組と呼ばれていたが、攘夷派の浪士たちを取り締まることで名を挙げ、アイヅ藩藩主から赤誠組の名を賜った。
組織は局長以下、副長二人。そのほか、一番～十番隊の組長と平の隊士たちで構成され、武士の身分を持たないが故に、種族、性別を問わず、勤皇の志があるものを広く受け入れている。強さは名のある組長でレベル9以上、古参の隊士でレベル6ほど。中堅でレベル4～5。新米ならレベル1～3ほどとなる。なお、名のある隊長は色では落ちない。
その一方で、一般市民の一部では『人斬り集団』等と揶揄されることもある。キョウの都では彼らの特徴である赤白だんだら模様の羽織を着ているだけで(多分、恐怖心により)大体は便宜を図ってもらえる。
幕府が創設した、元から武士だったエリートで構成されている治安維持組織の見廻り組とは仲が悪い。
PCは基本的に独立冒険者小隊、第零番隊(シナリオ: 赫き村雨 以降)の隊士として局長より任務を依頼という形で受けることになる。赤白だんだら模様の羽織を与えられて組長たちからは独立した動きをすることになる。身分を隠す際には羽織を着ないでいけば大丈夫なようだ。
しかし、鳥羽・伏見での敗戦以降、隊からは離反者、離脱者、傷病者、戦死者が相次ぎ、局長の加藤勇も表向きは新政府軍に捕らえられて斬首されたことになっている。全ての組長が抜けてしまい、既に新政府からも怨恨は受けても脅威とはみなされなくなった赤誠組をまとめているのは副長の土坂歳三。当初は赤誠組から冒険者に向けて出ていた依頼も、途中からヤマト藩の宿老紫苑から出るようになり、最後は藩主クロウ自らが依頼人となった。

諸注意

アヅマの特にキョウの都では外国人と異種族は警戒されているため、それぞれ変装が必要となる。また通貨が諸外国と違うのでシナリオ開始時に両替をする必要がある。
なお、効率よりもキャラクターがやりたいと思っていることを行う方が良い結果に転がることが多い。

シナリオ固有アイテム

赤誠組の羽織: 重さ0のアクセサリ。赤と白のだんだら模様の羽織。装備中は赤誠組の一員として周囲から扱われる。赤誠組は解散しているうえ、公式には徒に戦火を拡大し治安を乱したという見解になっているため、あまり着るべきではない。
赤誠組の額当て: 鉄製の防護部分に誠一文字が彫られた額当て。重量+1の頭部部分鎧として扱い、頭部に防御属性を追加する。金属製だが、昏倒などの判定に使用できない。また、和装の制限に含まれない。上記羽織と同様、アヅマではあまり装着すべきではない。基本取引価格: 外部取引不可(同PL間取引のみ可能。その場合の取引価格はレザーハットに準拠する)

誠

ネームドNPCリスト

(カトウ 元局長 加藤勇 イサミ)

『私にとって、キミたちもかけがえのない仲間であり家族だからな』
 『人を斬ることが正しいとは言わぬ。それを認めてしまえば人でなくなる。だが……斬らねばならないときもある。斬らずに捨て置けば。或いは捕縛して生かしておいたとしても、第二第三の事案が起きるだろう。これから先、お上が、この国がどうなるかはわからん。だが、いざ誠義を示さねばならぬ時に、度重なる離反で我らが弱体化しては多くの人間が死ぬことになる。それを防ぐためには、必要なことだ。少なくとも……私はそう思っているよ』
 『まあよいではないか、トシ。深くは聞かまい。どんな理由であれ…ここにいるということは、少なくとも敵ではないのであろう?』
 『まったくだ。助けに来たぞ、トシ』

赤誠組の局長。顔のごつい男前。肌つやは若いがおじさんっぽく見える。カリスマとリーダーシップを併せ持っている剣士。流派は不明。剣術道場『試衛館』から隊をミヤコの情勢を左右するまでに育て上げた。彼も隊長たちも大体はレベル9以上のイクサヨソオイ(ボスランク持ち)である。情に厚い人で、筆頭局長吉澤鴨を肅清するのにも断腸の思いだった。(第一話) 参謀として入隊した伊織甲子太郎の功績を認め、疑いをもちつつも確信に至っていなかった。(第三話) 水乃小路事件の直前に(第四話)伊織甲子太郎が赤誠組を割って御陵守護隊を結成し、それを誅殺するに至り苦しい胸の内を明らかにした。鳥羽・伏見の戦い(第五話)の直前に狙撃され戦闘不能となり、隊の指揮を歳三に預けた。冒険者たちが参陣した理由もおおよそ察している雰囲気だった。敗戦後に新政府軍に捕縛され、斬首の沙汰待ちの状態のまま、赤誠組の残党をおびき寄せるための餌としてトート北西部山岳地帯の新政府軍の陣地に囚われていた(第六話)がホオツキの冒険者により救出され、表向きには死んだかのように偽装され、大和国へと落ち延びた。六稜郭の戦い(第八話)では、大和国から援軍とともに駆けつけ絶体絶命の危機に陥った歳三たち旧幕府軍を救った。

(ツチサカ 元副長 土坂歳三 トシゾウ)

『この国を守るために、赤誠組は必要だ。そのためなら……俺は血飛沫を産湯に鬼になる。未練を残さず鬼になる』
 『…俺たちの行いが正しいか。それは……俺たちにはわからねえ。だが……少なくとも、俺は思う。俺たちは……正義ではなく、誠義を貫いた。ってな』
 『悪い……。おまえらと呼んだのは依頼だ。サンナンの後を追ってほしい。内容はそれだけだ。——これは一人言だが。真意を探れば……俺がどうとでもケツを拭いてやれる。これを頼めるのは……おまえらか、ソウシぐらいだ。頼む』
 『ああ、だから仕掛けられる前に、こちらから出鼻を挫く。今夜、御陵守護隊を交えて酒宴を開く。表向きは、奴らがミカドに仕える部隊になった祝いだ。門出を祝うとして途中まで見送り、そこで伏せた隊士と共に連中を殲滅する。おまえらには、独自の判断で動き敵首魁、伊織の首を獲って貰いたい』
 『あそこにいたら……今俺たちは！この時代の節目って時にガキのオムツ変えながら棒つき振らせて！食いつないでたんだぞ!？』
 『ソウシ……イサミさん。サンナン……俺は、夢でも見てるのか？それとも……ここは三途の川の先か……?』
 『……………。正直、生きてて一番驚いた。だが……こいつらにまた生きて会えたなら。どんな謀も受け入れるさ』

赤誠組の鬼の副長。細マッチョ。体脂肪率は1桁のようだ。作戦実行の際はこの人が陣頭指揮を執ることが多い。目つきの鋭い絶世の美男子。冷静な人。上から下まで黒衣。剣術の流派は不明。道場剣術はあまり得意ではない。殴ったり蹴ったり目潰しをしたり金的を狙ったりと、実戦は無類の強さを発揮するタイプで、卑怯と言われそうな戦術も平気でとる。負けず嫌いな性格でツルと道場で試合をして負けた直後に錘を付けた木刀を振っていた。その直後にツルと殴ったり体当たりをしたりと蹴り以外を解禁したスタイルで戦い引き分け、さらに次の勝負では全てを解禁してツルと戦ったがツルに敗北してしまった。参謀として入隊した伊織甲子太郎を危険視していたが、彼の危惧のとおり赤誠組を割って御陵守護隊が誕生することになる。(第四話) 本当は情に厚い一面を持っているはずだが、鬼の副長という立場上素直ではない言動が多い。

	<p>鳥羽・伏見の戦い(第五話)では、負傷して戦えない勇に代わって赤誠組の指揮を執った。作戦立案は性に合わないと感じている。</p> <p>鳥羽・伏見での敗戦以降赤誠組を率いて各地を転戦し、榎武揚と合流し蝦夷地に蝦夷共和国を建国宣言。六稜郭を拠点に新政府軍と戦った。(第八話)新政府軍に包囲され絶体絶命の危機に、死んだと思っていた赤誠組の幹部たちを中心とした援軍に救われ、その後の赤誠組最後の戦いに勝利。他の幹部たちと同様に死罪となる場所だったが、身柄をクロウ預かりとなる場所で死を免れた。</p>
<p>(ミナミケイスケ) 元副長 三南敬助</p>	<p>『…血が、ね。苦手なんだよ。私も、武士を志した身だ。死に恐れはない。人を、斬ることも。……ただ、前筆頭局長が亡くなってからね。血が…苦手になったんだよ。事情は知っている。だが………本当に。無関係な人も斬らなければならなかったのかと。必要な被害だけで済ませられなかったのかと……時折、そんなことを考えてしまうんだ』</p> <p>『願わくば…誰一人欠けることなく、ここに帰ってきてほしい。特に……総司や平助はすぐに無茶をするからね。みんな……私にとっては、可愛い弟たちだ』</p> <p>『私が戦わなければ、もっとたくさんの血が流れる。そのためなら……仏も鬼になるさ』</p> <p>『この首を持って帰って、脱走者、三南敬助は肅清した。そう、報告するんだ！』</p> <p>『私の死をもってしても。それでもなお、伊織先生が止まらなかった時。君たちが………血みどろの死地で平助を救えるだけの力があるか。それを知りたかったのさ』</p> <p>『真剣を握らずとも、木刀と算盤を握っていれば生きていける。人を斬って生き延びるのではなく、人を育てて共に生きる。私にとって……まさに夢のような日々でした』</p> <p>『私の手は……血に塗れています。たとえ誰が許しを下そうと……私が幸せになることは、私自身が許せません。この命のすべては、時代を担う子供たちに捧げたいのです』</p> <p>赤誠組の元副長。無害草食系男子。 流派は理心無双流と巖流。鏡花水月剣と鬼宿りという必殺技を隠し持つ。 年齢は20代半ば。明るい色の着物に身を包み、柔らかい表情を浮かべているが、立ち居振る舞いから結構な達人であることが分かる。懐に算盤を入れていることもある。 親しみやすい性格で隊士たちからも慕われている。 しかし、吉澤鴨暗殺事件(第一話)より、隊の在り方に疑問を持つようになり、沼田屋襲撃事件(第二話)では約半数ほどの隊士と共に仮病を使って出撃をしなかった。(ミカゲが直接話を聞き、病気と診断した) 忍者である明里から参謀として参入した伊織甲子太郎が赤誠組を分裂させる計画を知り、命を賭けてそれを止めようとしたが、冒険者たちに止められ、表向き死んだことになってクロウの元に身を寄せた。(第三話)大和国では剣術指南や子供相手の算術指南などをしてきた。(第四話) 六稜郭の戦い(第八話)では、再登場して絶体絶命の危機に陥った旧幕府軍を救い出した。 赤誠組の幹部として人を斬ってきたことに罪の意識を感じるあまり、自分が幸せになることを許せない。幸せを捨てて全てをこの国の子供たちへの教育に捧げる覚悟。一方的に慕ってきたミカゲにも優しさをみせた。</p>
<p>(オキウチソウシ) 元一番隊組長 沖内総司</p>	<p>『さあ……今のうちに、一気に畳みかk……ごほっ…ごほっ…あれえ。返り血が喉に入っちゃったかな……？』</p> <p>『大丈夫ですよ！ちょっと……人を斬りすぎて……返り血で、咽ちゃっただけです。ごほっ……！』</p> <p>『わっ！なんですかそれ！！楽しそう！』</p> <p>『強い順に敵だよ！！』</p> <p>『言ってるじゃないですか……。僕は…病気なんかで、死にたくない。どうせ、いつか死ぬなら……武士として、死にたいんです。だから……このぐらい…気合で…ごほっがはっ！』</p> <p>『治るなら……そうしてますよ。ミヤコのどの医者も……どうにもならないって言ってました。せめてこれを……なんて、託されたぐらいです』</p> <p>『あははー。なんだか大変なことになってますねえ』</p> <p>赤誠組の一番隊組長。中性的イケメン。天才肌の剣士で流派は理心無双流。普段は子供のような性格。神速の三段突きを得意とするが、彼の剣術は突きだけではない。剣を磨いたのは歳三と勇の力になるため。將軍家を支えて国を護りその先にあるみんなの笑顔のためとヘラに語った。 道場で試合を挑んでも何かと理由をつけて挑戦を避ける。 キョウ菓子が好きでキョウの市内ではよくスイーツの食べ歩きをしているようで、スイーツを奢るととんでもない額になる。 入隊試験(第一話)での借りを返しに来たミカゲをあっさり退け(第二話)、スイーツ食べ歩きに付き合わせた。ニノマエと道場で対戦した時(第一話)にはうっかり会話に気を取られて敗北するが、直後に新八の財布をかすめ取ってスイーツを食べに行くのであった。</p>

一方では、敵でも味方でも強い者と戦いたいという欲求も強いようだ。
 沼田屋事件(第二話)では戦いの中で負傷した際に吐血をした。その際は内臓が傷ついているという診断だったが、それ以降体重が減り咳が多くなったという。出奔した三南敬助の偽装された死を直接誤認した。(第三話)沼田屋事件の頃よりも体重が落ちていて、病の気配が濃密になった。
 色<<<甘味<<<(越えられない壁)<<<忠義
 御陵守護隊襲撃(第四話)の直前の健康チェックはチョコ大福と赤い呪いに阻まれた。
 鳥羽・伏見の戦い(第五話)の頃にはとうとう肺結核で倒れてしまい、死の寸前でエルルの治療によって小康を得たが、病身を押して参陣。厳しいお説教を受けた。戦闘後、重症者と一緒に大和国に送り届けられた。
 第六話の時点では、病は峠を超えて大和国の医師団により手術後の療養中となっていた。(手術自体はホオヅキで受けたと思われる)
 六稜郭の戦い(第八話)では、他の赤誠組幹部たちとともに再登場し絶体絶命の危機に陥っていた旧幕府軍を救い出した。

元二番隊長
 シンパチ
 門倉新八

『本来の間合いでないにもかかわらず、俺を追い込んだんだ。その実力は誇れ、謙遜するな。驕りは死を招くが、謙遜もまた然りだぞ?』
 『刀も同じだ。剣も銃も等しく凶器。剣術も銃術も等しく殺人術。だが、扱う者の意志で活人術にもなる。少なくとも俺はそう考えて、新米共に剣を教えた』
 『刀は嘘を吐かんのじゃ!』
 『仲間から託された、この時間。刀を握って幾星霧。初めて、命を生かす剣が振れる……』
 『もう命はいらないと! 家族を守るために捧げると……! わしらは、彼の遺志を継いだんじゃ! 彼の……命の証を!!』
 『よおし!! 源さん! この場から全員が退くのはたぶん無理じゃろう…ならば、競争じゃ。誰が何人斬れるか! 総司や左之はどうじゃ?』

赤誠組の二番隊長。おっさん系男前。
 道場の鬼で巖流の使い手。赤誠組一の使い手ともされている。隊内の貴重なツッコミ担当。いつも悪戯をした佐之助や平助を叩いている。
 ツルと道場で手合わせした際には太刀と小太刀の二本の木刀で応じてかろうじてツルを退けた。ミカゲも挑戦したがやはり簡単にあしらわれてしまった。(第一話)
 時をおいて、再びミカゲに道場で挑まれたがやはり僅差で返り討ちにし、クロードとの早撃ち勝負でもあっさり勝利した。(第二話)
 佐之助や平助も含めた若い隊士たちを育てることに心を砕いている様子。十番隊のフィーアとは超人的な稽古を繰り返しているようだ。
 水乃小路事件(第四話)では、赤誠組を裏切ってしまう思い悩む平助を熱く説得していた。
 鳥羽・伏見の戦い(第五話)では死に急ごうとする源三郎や総司の様子に機転を利かせて、その場の組長全員を生存に持ち込んだ。
 第五話から第六話への幕間で赤誠組から離脱した。
 アイヅ征伐(第七話)で佐之助と共に武藤一の危機に現れて命を救い、その後冒険者に伴われて大和国に落ち延びた。
 六稜郭の戦い(第八話)では、他の赤誠組幹部たちとともに再登場し絶体絶命の危機にあった旧幕府軍を救った。

元三番隊長
 ハジメ
 武藤一

『腕を上げたな……黒羽。見違えたぞ』
 『俺たちも……ミカドに仕える幕府の家臣だ』
 『あいつらはあいつらで戦っている。仲間を生かす最善の手段は、俺たちが敵を多く斬ることだ』
 『無用な心配だ。片付け次第後を追う……源さんを頼む』
 『赤誠の援軍と聞いてみれば……おまえたか』
 『俺は……赤誠組だ! 折れるものか!!』

赤誠組の三番隊長。無骨無口系イケメン。
 無愛想な居合の達人。
 初めて依頼を受けたホオヅキの冒険者たちを出迎えた人。
 依頼の仲介をしたクロウと出会っていきなり挨拶代わりに斬りかかった(第一話)。その時は十合ほど斬り合って、何事もなかったかのように刀を収め、互いの修練を認め合った。
 一時的に、伊織甲子太郎と共に御陵守護隊へと移ったが、これは御陵守護隊の中に間者として潜入していたにすぎなかった。

御陵守護隊襲撃時(第四話)、最初に伊織甲子太郎に斬りつけたのも彼だった。
鳥羽・伏見の戦い(第五話)では一人でサツマ・チョウシュウの兵を敵に回して奮闘し、源三郎を救おうとする冒険者たちの背中を押した。
新政府軍がアイツ征伐を発動することを知り(第七話)、赤誠組の後ろ盾になってくれていたアイツ藩への恩義に突き動かされて赤誠組を離れアイツ城に単身乗り込んだ。戦闘では新政府軍の夜襲で仲間を失った怒りで太刀筋が曇って愛刀を絡め取られ、脇差一本での戦いを強いられた。続く新政府軍のアイツ城内への奇襲では、脇差も弾き飛ばされて赤誠組の隊旗で戦う羽目になったが、絶体絶命のところまで駆けつけたシンパチとサノスケに命を救われた。その後は冒険者により大和国へと送り届けられた。
六稜郭の戦い(第八話)では、他の赤誠組幹部たちとともに再登場し絶体絶命の危機にあった旧幕府軍を救った。

六番隊組長 井口源三郎
(イグチ ゲンザブロウ)

『くっ……はっはっはっはっは！！これはこれは！小童共、このように幼い娘子に励まされるとは。わかりやすいほど顔に動揺が滲んでおるぞ？』
『わしは……試衛館。つまりは、ここに来る前からあのガキどもとは顔見知りでな。わしにとっては、**勇もトシもサンナンも。総司も新八も一も平助も左之も。みんな等しく息子みたいなものじゃ！**』
『農民が武士になる。最初はなにを言っておるのかと思ったが……わしの息子たちの意志は本物じゃった。一日二合の米だけで。朝から晩まで木刀を振り、トシは実家の薬屋を捨ててまで武士になることを望みおった。**そんなバカ息子共を、親であるわしが放っておくわけにはいかないじゃろう？**』
『わしは……**小僧二人(総司と平助)が喧嘩してたあの道場に戻りたいよ……**。一日二膳の米で木刀を振ってた、あの頃に』
『一つだけ言うが、お主にも死を悲しむ仲間はおるじゃろう。少なくともここにきておる仲間たちはそうじゃと思って居るが、違うのか？——ともかく、**俺のような老人よりも、己の心配をせい！なあと、お主に心配されずとも、わしは死にはせぬ！命は張るが、あの若造どもを残して死ぬにはまだ早いからう！**』
『どうにかなったよ……**わしが、わしが止めておれば……！**』

赤誠組の六番隊組長。老年前男前。
剣術の流派は不明。癒し系の気さくなおじさん。訪ねていくとお茶とお菓子を出してくれる。彼の性格は台詞が雄弁に語っている。伊織甲子太郎に不信感を抱いていた(第三話)彼の危惧は正しかった。**悩んだ末に脱走を選んだ三南敬助をただ一人止められる立ち位置にいたのに止めなかったことを後悔している。**(第四話)鳥羽・伏見の戦い(第五話)で重傷を負って大和国に送り届けられ療養していた。
六稜郭の戦い(第八話)では、他の赤誠組幹部たちとともに再登場し絶体絶命の危機にあった旧幕府軍を救った。

元八番隊組長 工藤平助
(クドウ ヘイスケ)

『先生の考え方はすごく先鋭的だし、でも、**トシと噛みあってないのも知ってる**。だからさ、俺が間に立って二人を仲良くできたらなって思うんだよね！』
『家族…家族……。俺の……。俺、幸せすぎて泣けてくらあ！天涯孤独の工藤平助には……抱えきれないほどの家族がいたんだ！新八さん……ありがとう！』
表向きは故人だが生きている。元御陵守護隊隊士。**元赤誠組の八番隊組長**。シヨタ系イケメン。剣術の流派は風代流。まだ**少年で無邪気な性格**。好奇心旺盛でアシュリーが奏でる異国の音楽にすぐに飛びついた。(第二話)
また、**伊織甲子太郎の思想にもかぶれていた**。吉川稔磨との戦闘では障子越しに奇襲を仕掛けて槍を両断したが、逆襲に遭い額に槍を受け倒れてしまう。相当の深手で、ルエルのハンドパワーで癒されてもその場の戦闘に復帰することはできなかった。
水乃小路事件(第四話)では伊織の側につき御陵守護隊が襲撃された時、門倉新八と激闘を繰り広げたが、**元々局長も副長も隊長たちも彼をうっかり逃がすつもりだった。自分は裏切り者だと自責の念から死ぬつもりだったが新八の説得で思いとどまった。**
表向きは赤誠組を裏切ったことになるから死罪にせざるを得なかったが、彼は行方不明扱いとなりクドウのもとに身を寄せることになった。大和国では何かあれば真っ先に突っ込んでいく頼りの守護隊長となっているらしい。(第五話)
六稜郭の戦い(第八話)では、他の赤誠組幹部たちとともに再登場し絶体絶命の危機にあった旧幕府軍を救った。

<p>(カワダ サノスケ) 元十番隊組長 河田佐之助</p>	<p>『俺たち組長がビビってどうすんだよ！！俺たちが真っ先に突っ込んで後の奴らを奮い立たせてやる。それでこそ組長だろ！？』 『おまえら……。無茶しやがってバカやろおおおオオオオオオオオオオオオっっ！！死んだらぶっ殺すからな！！！！！！』 『どうした！泣くほど怖かったか！？だがそれが戦場だ！気を抜くんじゃねえぞ！！』 『おうフィーア！なにへバツてやがる！てめえの筋肉はそんなもんか！？』</p> <p>赤誠組の十番隊組長。脳筋系男前。 剣術の流派は不明だが槍の使い手。歩く筋肉。 とても暑苦しい漢。 大体いつも脳筋発言をしている。よく台所でつまみ食いをしているらしい。 第五話から第六話への幕間で赤誠組から離脱した。 アイツ征伐の時に(第七話)、武藤一の絶体絶命の危機に新八とともに現れて命を救った。その後、大和国に落ち延びていった。 六稜郭の戦い(第八話)では、他の赤誠組幹部たちとともに再登場し絶体絶命の危機にあった旧幕府軍を救った。</p>
<p>元十番隊隊士 フィーア</p>	<p>『俺は何があらうと局長たちに忠義を尽くしますが』 『おっしゃあああああああ！出番だぜ！！』 『おおおおおっ！おまえたちも無事だったか！！鳥羽伏見の戦いで降参を見かけないから心配したぞ！！』 『誰か一人でも欠けたらその分だけ追い込まれるからな。一人でも多く生き残れる選択肢を選ぶさ』 『サノの旦那！？生きてたんすか！？』</p> <p>十番隊のドラゴニュートの隊士。 アシュリーにお菓子をくれた人。(第二話) もう一人の隊士と共に沼田屋から脱出した志士たちと戦った。死の覚悟を決めて狂気を纏ったかのような黒衣の槍使いの男(吉川稔磨)と戦っていたが、さらに数人の志士に取り囲まれて多勢に無勢で、もう一人の隊士は討ち死にし自分も深手を負わされた。 アシュリーの治癒によって一命を取り留めて、冒険者たちにたくさんの甘味を奢ってくれた。 新八とも過激極まる稽古を積んでいたようだが、最終的には筋肉を一番信用していた。 一時的に、伊織甲子太郎と共に御陵守護隊に移っていたが、これは御陵守護隊の内情を探る間者として潜入していたにすぎなかった。(第四話) 鳥羽・伏見の戦い(第五話)でも元気に大暴れしていた。その後も歳三に最後まで付き従い戦い抜いた。 六稜郭の戦い(第八話)では決死の強行偵察で新政府軍の本営の位置を探し当てた。新政府軍の罠に使われてしまったが生き残り、救援に来た佐之助との再会を果たした。</p>
<p>(ヨシザキ ススム) 元観察方 吉崎丞</p>	<p>『良く効く薬は、私が特別に調合したもの。飲めば少しの間……良い酒に酔える。そんな薬でございませう』</p> <p>赤誠組の観察方。隠密行動を得意とする。 傾国の美女になったり遊女になったりと毎回変装をして姿を現した。 第一話で吉澤達を酔わせる酒に混入する毒を用意したのもこの人。毒は門外不出らしい。 沼田屋事件(第二話)では出番はなく、代わりにフェルパーの男性が観察方を務めていた。 第四話で再登場した時は、御陵守護隊襲撃時だけあって、さすがに男装をしていた。 さらに第五話では登場はしなかったものの戦闘で負傷して、大和国に送り届けられた。 六稜郭の戦い(第八話)にもいたはずだが他の隊長たちに比べて影が薄いため確証がない。</p>

<p>アイツ公</p>	<p>『私は……この首を差し出し、民の安寧を乞うつもりでいました』 『私は最後まで反対したのですが……聞き入れてもらえぬどころか、女子供まで戦支度を始める始末。彼らの忠節を足蹴にすることもできず、抗戦を決めました』 『アイツの民は朽ちるとも、アイツの志は生きる。そういった覚悟で臨んでおります。ですが……皆様がそこまでの覚悟を持つ必要はありません。危険と判断すれば、すぐにアイツを離れてください。アイツ人は感謝こそすれど、皆様を恨むことなど決してありません』 『私の命一つで片付くならばそうしたでしょうが……そこはお話した通りです。なれば、私は共に戦ってくれる者たちと共に、この命を後のアイツに捧げましょう』 『……二君に仕えず。それこそ誠の義、誠義であると。言葉を預かるのならば……必ず、生き残ってください』</p> <p>本名未出。赤誠組の後ろ盾となっていたアイツ藩の藩主。諸大名が次々と新政府側につく中、最後まで旧幕府側であり続けた。その結果、新政府軍のアイツ征伐が決まり、領民の安全を考えて投降しようとしたが臣下たちに止められ、戦うに至った。(第七話)領民たちのことを思い、街道の整備などの事業にも励み、領民の人気は高かった。ウィリアムに最後の言葉を託した。その後身柄はアイツの寺に置かれいずれトートに移送されることになっていた。</p>
<p>大和国宿老 (アマギ シオン) 天城紫苑</p>	<p>『黒羽ちゃんの大事な仲間の居る赤誠組が、そんな理由で全滅の憂き目にあうのは避けたいのよね、お姉ちゃんとしては』 『上手く正体とか依頼のことを隠して、できるだけたくさん隊士が生き残れるように手を貸してほしいなーっておもって』 『ご飯はおねえちゃんが作ってあげるわね～。とりあえずの治療はしてもらうから、みんなそこでおとなしくしてね』</p> <p>大和国大名クロウのゆるふわ姉にして宿老。歳は二十代半ば。妹の千草と桃花と共に、クロウに代わって政治向きのことを色々と画策している。戦闘では着流し姿のまま闘うらしい。第五話から第七話は赤誠組からの直接の依頼ではなく、紫苑からの依頼となっている。表向きは中立ということになっており幕府側にも新政府側にも目をつけられないために、ホオツキの冒険者には依頼者を明かさないうまい毎回言い含めている。 最終的な決戦に備えて対外折衝を行い内政を整え軍を強化し、六稜郭の戦いに間に合わせた。それなりに気に入った相手に対しては世話好きで、好きならば甘やかしに来る。</p>
<p>大和国家老 (アマギ チグサ) 天城千草</p>	<p>『シオン姉、今大事な話、あたしの見せ場』 『まじめな話は、ちょっと休んでからにしようぜ』</p> <p>大和国大名クロウの妹にして家老。歳は二十歳前後。姉妹の中の脳筋枠。中性的で首から下は美少年。裏で色々動いていたようだが詳細は不明。シリーズ外シナリオにて冷たく罵ってお仕置きをするという証言あり。第八話での登場時、戦場では胴鎧に乗馬袴という姿だった。</p>
<p>大和国家老 (アマギ モモカ) 天城桃花</p>	<p>『ちなみに、停戦の使者の護衛は私とお兄ちゃんが大和の精鋭と一緒にやってるよ。で、戦闘してたら危ないから、ってことで、二人で先行して状況を見てくるって言って足止め中！』</p> <p>大和国大名クロウの末妹にして家老。歳は十代にも見えるが成人はしているらしい。姉妹の中ではあざとい枠で、ややギャルっぽい。シリーズ外シナリオにて体形がツルペタであるという証言あり。彼女も裏で色々動いていたようだが詳細は不明。</p>

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">クロウ</p>	<p>『おう、やっと私の出番か！難しい話が続いたから寝てしまうところだったぞ！！』 『私が主に拾われたのは割と最近だし、頭は良くないからうまく言えんが……。これはきっと、一番多く仲間を守れる作戦だと思うんだ。信じて待ってくれないか？』</p> <p>クロウが大和国の軍備を整備するにあたって組織した精鋭部隊“陰狼衆”の長を務めるミノタウロスの女性。機密保持のため本名を名乗ることは許されずコードネームのみを名乗っている。得物は100kg以上の重さがありそうな巨大なハンマー。頭が良くないと公言しているのは種族の特性上やむを得ない。頭を使うことは主か副長に任せているようだ。陰狼衆は重装の部隊と軽装の部隊に大きく二分されるが彼女が率いるのは重装部隊。戦闘時には武器はそれぞれが違ったものを使用するが着用する鎧は黒いフルプレートで統一されている。第八話で登場。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">ミッドナイト</p>	<p>『お初にお目にかかります。陰狼衆が副長。コードネーム『ミッドナイト』と申します。以後お見知りおきを……』 『よろしければ、今宵は私に最高の笑顔を見せてくれませんか？この私がいる限り、幸せという名の贈り物が絶えずあなたのもとに届きますよ』 『かしこまりました。それでは——今宵の運命の出会いに。そして貴女の可憐な笑顔に、乾杯』 『聡明を気取る人々は酒を悪く言いますが、俺に言わせれば酒は心を開く万能鍵です。今宵も心の声を俺に聞かせてください』</p> <p>クロウが大和国の軍備を整備する際に組織した精鋭部隊“陰狼衆”の副長を務めるシャドウの男性。超イケメンで仕草や雰囲気はホストのよう。クロウに代わって作戦の説明などもこなす。諜報に長けているようで、テントに連れ込んだエルルから気づかれずにあれこれ情報を抜き取っていた疑いがある。機密保持のため本名を名乗ることは許されずコードネームのみを名乗っている。陰狼衆は重装の部隊と軽装の部隊に二分されるが彼が率いるのは軽装部隊。戦闘時は黒い忍び衣を着用し頭巾と口布で顔を隠している。第八話で登場。</p>

<p>(ナカタ・ハンジロウ)</p> <p>中田 半次郎</p>	<p>『やれやれ……一番面倒な手を打たれたな』 『新兵衛！！……逝ったか。だが、死に様はしかと見届けたぞ…！』 『賢明なこって。まあ……アンタらの太刀筋や術は新兵衛の命尽きるまで見させてもらった。できれば二度と会いたくねえが……まあ、もし戦場で闘りあうことになったら、その時はよろしくな』 『おいおい、マジかよ。完全にしてやられたな……こりゃよっぽど頭の切れるやつが赤誠組についてるみたいだな』 『こっちの言葉は通じねえんだったな……まあいいさ。言葉がわからずとも、剣で語るさ！』 『はは……。ここまでか。だが……最後まで意地を貫けたんだ。悪くねえ……』 『ゲンサイは死の際に居合の境地にたどり着いたが……。ああ……きれいな青空だ。もっと昏い場所で死ぬかと思ってたが……俺は恵まれてるな。我が人生に……一片の悔いなし、ってやつだ——』</p> <p>四大人斬りの一人。人呼んで啄木鳥。サツマ藩出身の剣豪(職に非ず)。柳神流を修めた剣の達人。柳神流をベースに啄木鳥(きつつき)と呼ばれる独自の剣術を用いることで有名。剣の腕のみならず、兵法や軍略。諜報にも優れている。その噂を裏付けるかのように戦場でも冷静に前線の隊長をかばって、新兵衛とホオヅキの冒険者たちとの戦闘を見守っていた。(第五話) 六稜郭の戦い(第八話)では最後に冒険者達に立ちふさがる敵となった。独特な構えからのタフさと正確に水月の一点を連続で貫く刺突技『啄木鳥』をみせ、サツマ武士としての意地を最後まで貫き通し討ち死にした。満ち足りた最後だったようで、その魂はまったく穢れていなかった。</p>
<p>(カワムラ)</p> <p>河村 彦齋</p> <p>ゲンサイ</p>	<p>『……。ただの狙撃手ではない、か。鉄砲は恐ろしくない……が、美しくない。死合いには似合わぬ』 『……。死地に立つ。故に我らは在る。あの気は……死地でのみ振るわれる気だ』 『……。不満など、ない。散るには良い日だ』 『……。良い。死地にあるが故、感覚は研ぎ澄まされる。狙撃手。貴様もまた然り』 『ぐっ……。なるほど……死地に至りて見えぬ極意……。死に至りて……片鱗か』 『——見えた！水の一滴……！』</p> <p>四大人斬りの一人。人呼んで抜刀齋。死に際して夢想流の極みの境地にたどりついた剣士。見目麗しく常に平常心を崩さない。 六稜郭の戦い(第八話)で、冒険者たちに最後に立ちふさがった。自然体から繰り出す居合は正確無比にして神速。戦場を縦横に駆け抜け遠心力を利用した斬撃を放つ『不知火』、九連抜刀術『霧祓』や、自らの死を対価に会得した『居合の境地』などにより超高速の剣戟を繰り広げた。死に際して居合の境地に達したことに満足して討ち死にした。彼の魂もまたまったく穢れていなかった。</p>
<p>(ヤマナカ)</p> <p>山中新兵衛</p> <p>シンベエ</p>	<p>『任せろ……。ちなみに、殺しても構わんのだろう？』 『多対戦か……どうってことはない。京で役人どもを相手取る時は、護衛共も纏めて斬ってきたからな……』 『……。腕は隊長格と同等か。おい、半次郎！きっちり手は打っておけよ！』 『一人で闘るのは厳しいが……一人で殺るならできそうだ。さあ……来いよ赤誠組。人斬り新兵衛の名、地獄の鬼にも伝えてくれや！』 『死に際に……最高の一発が打てるとは……な。あばよ……先に逝って…待ってるぜ』</p> <p>四大人斬りの一人。人呼んで人斬り新兵衛。サツマの擁していた剣士。赤誠組局長曰く『彼の者の初太刀は避けよ』とすら言われる剛剣の使い手。柳神流の剣士であり、多くの尊皇派の要人並びに護衛を一撃の元に葬り去る達人。彼の大上段の構えからのカウンター戦法はかなり強力で、まさに『人斬り』の名に相応しいものだった。共に戦っていた半次郎に後を託して冒険者たちと堂々と渡り合い倒された。(第五話)</p>

<p>(イゾウ) 以蔵</p>	<p>四大人斬りの一人。姓は明かされなかった。兇人の二つ名で知られる剣豪。薄汚れた割れた傘を目深に被り、着物も汗と泥とたくさんの返り血で汚れている。敵味方どころか一般人ですら目について人間を斬ってしまうバーサーカー。誰かと一緒に行動するというではなく、誰かの命令に従うということもなく片端から人を斬り続ける。新政府軍は彼を捕縛するには損害が大きすぎ、うまく誘導すれば敵を倒してくれるため彼を放置していた。 戦闘後、彼の戦い方は手にしていた妖刀『兇鬼』の呪いにより付与されたものだということが分かった。この刀は一度抜くと使い手をバーサークに似た戦闘をさせ、誰かを殺して鞘に収めるまでその狂気じみた戦いは止まらないというものだった。 死後、彼の軀は完全に消失してしまった。(第六話)</p>
<p>(タイラ 平 凡太郎) ボンタロウ</p>	<p>『ど、どどどどどうするのだ！私が狙われてしまうではないか！！』 『よし、これ以上の作戦行動は被害の方が大きい、全軍後退だ！！』 『ぐぬぬぬぬ！ええい！頭が高い！控えおろう！！この私を誰と心得る！？幕府の重鎮！平家次期党首！平凡太郎であるぞ！！控えおろう！！』</p> <p>名門の家に長男として生まれたが、自分よりも優秀な次男(非凡介)が家を継ぐ流れを覆すために手柄を渴望し続けた。 気位が高いが能力は平凡。それでも一万五千の兵を率いることはできた。 鳥羽・伏見の戦い(第五話)では新政府軍の隊長を務め、六稜郭の戦い(第八話)では、一万五千の新政府軍を指揮して旧幕府軍と最後の戦いに臨んだが、最期に爆死した。</p>
<p>(タイラ 平 非凡乃介) ヒボンノスケ</p>	<p>『…………。お初にお目にかかります。私は平家次男、平非凡乃介と申します。まずは、兄の非道をお詫びさせてください』</p> <p>名門平家の優秀な次男。 六稜郭の戦い(第八話)では停戦交渉をまとめるために来ていたが、兄の凡太郎が戦死したため停戦交渉での新政府軍の代表を務めた。腰の低いいかにも優秀そうな人。</p>
<p>(コンスコン) 今須 紺</p>	<p>第七話に登場した新政府軍の将。ただのネタキャラ。</p>
<p>(ミキサブロウ) 三樹三郎</p>	<p>本編未登場。姓は不明。(鈴原とか正木とかになるのだろうか?)伊織甲子太郎の弟で御陵守護隊の残党。加藤勇暗殺未遂事件に関わったと目される男。赤誠組の九番隊組長だったかどうかは不明。</p>
<p>(仮名) マロ</p>	<p>本名不明。蹴鞠が似合う。第八話に登場した朝廷よりの使者。公家と思われる。新政府軍と旧幕府軍に停戦を申し渡すためにミヤコから蝦夷地へと出張した。</p>

<p>(ヨシザワ)</p> <p>筆頭局長 吉澤鴨</p>	<p>『当然であろう！この赤誠組はこのわし、吉澤鴨が作ったのじゃ！市井に至るまでその名を知り、慕うのは当然じゃろう！』 『貴様らになにがわかる！！田舎出身の百姓が武士になるために、どれほどの時間が必要なのかと！！』</p> <p>赤誠組の元筆頭局長。 赤誠組を大きく育て上げるのに、装備・屯所をはじめとした資金面などで多大な貢献をした。最初は商家を説得して金を出してもらっていたようだが、徐々に商家を脅して金を(建前では借金だが、返済したことはない)取るようになった。金を貸し渋る商家に火を放ったり娘を犯したり、それだけでなく気に入らない遊女の髪を切ったり道を塞いだ力士を斬殺したりと狼藉をはたらくようになり、最終的にはアイツ藩から肅清するようと命が下り、誅殺された。(第一話) 彼なりに赤誠組を大事に思っていたようだが、不器用や劣等感故にその道を誤ってしまったと言える。 豪快で豪気な性格で乱暴。組長たち以上の巖流と柳神流の達人。喧嘩も絶えなかった。誘われれば落ちるほど好色で酒好き。鼯頂の芸者は桔梗屋のお梅。 その場のPCの好みに敢えて順をつけるなら、ミカゲ>ヘラ>ツル>アリーヤ。</p>
<p>(タカヤマ)</p> <p>高山五郎 ゴロウ</p>	<p>『女は細ければ細いほど美しい！胸や身体に脂肪の塊をぶら下げるなんぞ言語道断だ！』</p> <p>吉澤鴨の腹心の一人。忠実な犬。 穴戸八重垣流の使い手で左目に眼帯をしていた。組長には劣るがそれなりの腕前。集団戦では嫌がらせが多い。精神的にあまり強くないらしい 吉澤鴨と一緒に誅殺された。(第一話) 酒は好きらしい。吉澤が酔うと酔うまで飲まされる。 酒が入ると急に女にだらしがなくなる。 鼯頂の芸者は桔梗屋のお栄。 その場のPCの好みに敢えて順をつけるなら、ヘラ>アリーヤ>ミカゲ>ツルの順。</p>
<p>(アライ)</p> <p>新井錦 ニシキ</p>	<p>『イイ……！ああ、実にイイツ！無口で何も話さぬその姿。まさに、くーるびゅーてー！』</p> <p>吉澤鴨の腹心。冷静沈着な苦勞人。流派は風代流で剣術は大したことはないが吉澤が最も信頼する男だった。肉体的にはひ弱だが精神面は強かった。 吉澤鴨と一緒に誅殺された。(第一話) 酒は好きらしい。吉澤が酔うと酔うまで飲まされる。 鼯頂の芸者は桔梗屋のお里。 女には一途で懇意にしている女以外にはあまり心を開かない。 その場のPCの好みに敢えて順をつけるなら、アリーヤ>ミカゲ>ヘラ>ツルの順。</p>

<p>伊織甲子太郎 (イオリカシタロウ)</p>	<p>『この動乱の時代、生き抜くためには剣の腕だけではいけません！知識もまた武器なのです！！』 『諸外国の脅威に立ち向かうためには、国内で争ってはダメなのです。かつての因縁は捨てるべきです』 『この国に必要なものは！優雅で、華麗で、美しい思想なのです！！さあ皆さん！！美しき花に集う蝶のように、この乱世を典雅に舞うのです！！』 『乱世をたった一人が纏めることなどではしませんよ。ミカドという象徴、ショウゲンという絶対存在。それらでもまとまらぬなら、必要なのは強き存在。長き怠慢の中で、旧幕府はその力を失っていったのです。それでもなお、古きに縛られる赤誠組は……力の使い方を間違っているのだ！』 『ふっははははは！死と生の狭間！これぞまさに、最高の美！さあ、きなさい！あなた方にもこの至高の美を体験させてあげましょう！！』 『……はっははは！そうか、私は……道化だったのです。歴史の、荒波を…操りながら。結局は……荒波に呑まれていた。だが……一つ、変わらない…事実は、ある。私は……帝に、仕える……。家臣、だ。ならば……散り際、も、美しく——奸賊ばら！！』</p> <p>故人。御陵守護隊隊士。赤誠組から離反して『御陵守護隊』を創設した男。柳神流の使い手。カウンターの鬼。彼の最期の行動もやはりカウンター(とどめに喰らったダメージをそのまま返す)だった。元は赤誠組に参謀として入隊していた。ホモらしく、土坂歳三の肉体美に魅せられている。三國〇双の張郃と、武〇鍊金のパピヨンとを二で割って美しさだけを三倍したイメージらしい。弁舌に優れ軍略に長けている。しかし、思想は討幕寄りの尊王攘夷思想。赤誠組を乗っ取るつもりで入隊した。しかし、赤誠組を乗っ取るのは難しいと判断し、赤誠組を分裂させようと画策していた。加藤勇、土坂歳三、井口源三郎からは疑いの目で見られているが、工藤平助には心酔されている。彼の真意を知った三南敬助を悲壮な自刃の決意へと追い込んだ。(第三話) 赤誠組に、御陵守護隊としての門出を祝うと酒宴に誘い出され、その帰りに赤誠組の隊士の襲撃を受けて斬殺された。最後は蝶に伴われて天に昇っていった。(第四話) 彼の行動は私利私欲のためではなく彼なりに世を憂いての行動だった。</p>
<p>吉川稔麿</p>	<p>『いい……殺気だ。こい……怒りを、殺意を。狂気を……その身に宿せ。それを破ってこそ……革命の炎は……赫く、激しく燃え上がる』 『……長州藩士、吉川稔麿。ここに壬生狼共を血祭りに挙げ、革命を成し遂げるものなり……！』 『ぐっが……。こんな……ところで……だが……炎は……消えぬ。地獄で……待って、いるぞ……餓狼共……』</p> <p>故人。チョウシュウ藩の中でも過激派で知られる志士。大規模な作戦を前にキョウの都に入っていた。(第二話) 死を覚悟して狂気のような強さを手に入れた志士。平助の額を割り、総司には槍の石突で体勢を崩してから鋭い足刀を入れて吹っ飛ばした。彼の必殺技【死の螺旋】は貫通属性を持つ恐るべき攻撃。</p>
<p>宮城鼎蔵</p>	<p>故人。チョウシュウ藩の志士。レベル5~6あたり。冒険者たちが不在のうちにクロウに斬られた。(第二話)</p>
<p>海坊主</p>	<p>『そこに、金を入れて……待ってろ。対価に見合うものをやる』</p> <p>キョウの都の裏路地の奥にある廃屋にしか見えない呉服屋の店主。(第三話) 冒険者たちにアヅマ風の装いに見える衣装(いつも使用している鎧と同じ性能を持つフレイバーアイテム)を仕立ててくれる。 ミノタウロスかあるいは毛の無いウェアウルフかと思いたくなるような、筋骨隆々のスキンヘッドのアヅマ人男性。戦闘中で敵として出てきたなら精神抵抗してもらおうレベルの威圧感。</p>

事件簿(シナリオ)

第一話 誠義の在り方(吉澤鴨暗殺事件)

参加PC:ニノマエ ヘラ アリーヤ ツル ミカゲ

クロウの仲介で赤誠組からホオツキの冒険者に最初に出された依頼。

赤誠組の筆頭局長でかねてから素行の悪かった**吉澤鴨をチョウシュウ藩の犯行に見せかけて誅殺する**というのが任務の内容だった。

ホオツキの冒険者たちは、**入隊試験と称して、組長たちと手合わせをして実力を隊士たちに見せつけてから、まずは食客という立場で赤誠組に入ることとなった。**

入隊試験では沖内総司が一人で冒険者を相手にする。ツルが良いところで佩刀を飛ばしてしまうというボケをかましつつも、最終的にはヘラの幻影(という演出のデバフ)で動きを鈍らされたところでツルの大上段からの一撃を当てることができた。**実力を見せたことで隊士たちに受け入れられる冒険者たち。**

吉澤と腹心二人を酒宴の席に呼んで毒入りの酒で気持ちよく酔わせ、床術で組み伏せることで普段の実力を発揮できないほどに弱らせてから、ホオツキの冒険者たちが、腹心ともども斬殺した。

この裏ではクロウと隊士たちが、この犯行が赤誠組の内部闘争ではなくチョウシュウ藩の犯行とするために、**事件を目撃した可能性がある吉澤の屋敷にいた奉公人や女中やら遊女やらを皆殺しにしている。**

事件の後、冒険者たちが帰還するときに、**土坂歳三はこれからも誠義を貫くことを冒険者たちに約束し、ホオツキの冒険者たちはそれぞれに隊士や組長たちを縁を深めて戻っていくのであった。**

冒険者たちが去ってから、予定通り**吉澤達はチョウシュウ藩の者たちに暗殺されたと発表され、隊の結束は強まり、ますます人種も性別も関係なく志のある隊士が集まってくるようになった。**

第二話 赫き村雨(沼田屋襲撃事件)

参加PC:クロード ルエル アシュリー ミカゲ

八月十八日の政変によりキョウの都を追われたチョウシュウ藩。彼らは体勢を立て直すために暗躍をし始める。チョウシュウ藩士が榎屋という商家に盛んに出入りしているという情報を掴んだ赤誠組は主人を捕縛して尋問する一方で、**チョウシュウ藩の大規模な作戦に備えてホオツキの冒険者たちを遊撃隊として再び招くこととなった。**

ルエルは囚われの身となり拷問されていた榎屋主人を癒すことで見事に自白に導き、赤誠組はチョウシュウ藩の志士たちの、『風の強い日を見計らい、御所に火を放ち、騒ぎの間に天子様を長州へとお連れする』という計画を掴むことができた。

赤誠組は観察方が掴んだチョウシュウ藩士が集結しているという二ヶ所の怪しい商家五国屋と沼田屋に、幕府が創設した治安維持組織の見廻り組と共同で襲撃をかけることとなった。**冒険者たちは沼田屋への襲撃を、加藤勇、沖内総司、門倉新八、工藤平助と共に担当することとなる。**

決行の時刻、見廻り組は現れることなく、赤誠組だけで突入が開始される。クロードの銃撃でお約束の階段落ちを披露する志士(仮名:キタゾエキツマ)。

冒険者たちはそのまま二階に突入して手当たり次第に降伏に応じない志士たちを倒していく。

窓から逃げた志士を追いかけているうちに冒険者たちは傷ついた隊士を助け、狂気じみた黒衣の槍使いの話を聞き、その男を追いかけて再び沼田屋に戻る。

そして**冒険者は修羅と化した志士吉川と遭遇する。奇襲した平助も総司も深手を負ってしまい、冒険者たちは吉川と戦いかりうじて勝利を収める。**しかし、戦いの中で吐血してしまった総司に不安の目が注がれる。

事後になってようやく顔を見せた見廻り組に冒険者たちは軽蔑の感情を向けるのだった。

第三話 祇園囃子が誘うもの(三南敬助出奔事件)

参加PC:ヘラ シエル アリーヤ ミカゲ

吉澤鴨肅清事件、沼田屋襲撃事件などで赤誠組に貢献したホオツキの冒険者で構成される独立冒険者小隊・第零番隊。赤誠組は普段の彼女らの働きに報いようと、数千年続くキョウの都の祇園祭で日頃の重圧から解放されて欲しいと招いた。

冒険者たちは都の裏路地の奥の秘密めいた呉服屋でそれぞれにアヅマ風の衣装を整える。呉服屋に案内する沖内総司は最近土坂歳三が悩みを抱えていると冒険者たちに内緒話をする。参謀役が必要となった赤誠組は伊織甲子太郎という男を抱えたが、土坂歳三は討幕思想に近い甲子太郎を危険視していた。そして、三南敬助もまた悩みを抱えていると知る冒険者たち。

それぞれの方法で伊織甲子太郎を調査する冒険者たちだったが、伊織甲子太郎への不信感を感じ取りつつも、決定打が得られない。進まない調査の翌日、冒険者たちは突如として副長室に呼び出され、そこで歳三と勇から三南敬助が街に出たまま戻っていないと告げられる。歳三と勇は冒険者たちに三南を追うようにと依頼する。一方総司も不思議な感覚で三南の姿が消えたことを悟り、独自に馬を駆って捜索に出る。

三南の足取りを追う冒険者たちは、三南と美しい女性がトウカイドウを経てトートへ向かうつもりであることを突き止め、馬を借りてその後を追う。三南と女性に追いついた冒険者たちだったが、忍者のような身のこなしを見せる女性を逃がし冒険者たちに真意を知りたければ自分を倒せと三南に言われる。ミカゲの説得にも応じなかった三南をかるうじて殺すことなく倒すことができた冒険者たち。そこで三南の真意が明かされた。

三南は、忍者であった明里から伊織甲子太郎が赤誠組を乗っ取るつもりだったがそれができそうにないため赤誠組を分裂させるつもりであるという情報を得たが、情報の出所を明かせない三南は赤誠組の損害を最も小さくして甲子太郎の計画を止めるためには自分が死ぬしかない悲壮な決意していた。ミカゲは自刃しそうになった三南を止め、冒険者たちは三南を殺さずに甲子太郎の計画を止めるために三南が死んだように偽装することを決意。ヘラは大切な存在のアンデッドを犠牲にして幻影の魔術をかけて偽の三南の死体を、馬を駆って追いかけてきた総司に見せ、悲しげな総司は三南の最期を誤認する。

三南の死を知らされて沈痛な表情を見せる歳三と勇。表向き死んだことになった三南は、ヤマトの国のクロウのもとに身を寄せることになった。一方、甲子太郎は三南の死の偽装を疑いつつも確証を得ることができず苛立ちを募らせる。ヘラは大切なアンデッドを犠牲にして恩人である総司や歳三を欺いたことに思い悩み、シエルはヘラを案じ、ミカゲは想いを寄せていた三南に悲壮な決意をさせた甲子太郎への憎悪を募らせるのだった。

インターミッション(第四話(託された時間)での状況説明)

沼田屋騒動(シナリオ:赫き村雨)で、赤誠組は幕府に敵対する過激派の討伐に成功したが、討伐できたのはあくまで一角であり、その火種はくすぶっていた。そのため、反旗を翻し続けるチョウシュウに対して幕府は征伐軍を起こし、赤誠組も従軍。この頃に赤誠組に伊織甲子太郎が入隊する。

幕府はさらなる打撃を与えるために第二次征伐軍を興し、赤誠組も従軍する。(この従軍手前で三南敬助出奔事件。(シナリオ:祇園囃子が誘うもの)大和国へ落ち延びる)しかし、今まで幕府の重鎮であったサツマ藩が幕府より離反。チョウシュウ藩と手を結ぶ。この同盟にはトサ脱藩浪士の手引きがあったとされているが、ともあれサツマチョウシュウ同盟の精鋭を前に、幕府軍は敗走。その後も薩長の勢いは止まらず、幕府軍は敗北を重ねる。(このあたりで御陵守護隊が赤誠組から離反独立)

なお、薩長同盟を手引きしたトサ脱藩藩士は暗殺されている。

赤誠組はこれまでの活躍・貢献を鑑みて幕府お抱えの部隊として、名実ともに『侍』となることができた。農民出身でありながら、これは異例の事態だ。しかし、その後幕府内で大規模な政変が起こり、かつて幕府内で重鎮とされていた者たちがことごとく立場を追われ、薩長派が幕府の大勢を握ることになった。その結果、幕臣になっていた赤誠組も政治的には非常に厳しい立場に立たされることとなった。

第四話 託された時間(水乃小路事件)

参加PC:アリーヤ、ヘラ、ミカゲ

御陵守護隊という離反者を出してしまった赤誠組。離反者を一網打尽にする作戦があると招かれたホオヅキの冒険者たち。

キョウのミヤコに移動する前にヤマト国の天城家で一泊していく。その時にクロウの姉妹たちより、アヅマの最新の情報を知りながら無駄な死者が出ないようにしてほしいと頼まれた。甲子太郎を殺す気満々のミカゲと、それが私怨からものなら止めると言うヘラと、必要以上の関わりを避けるクールなアリーヤ。三者三様の夜が更ける。

翌日キョウのミヤコに移動した冒険者たちは歳三から任務の詳細を聞く。それは、赤誠組から離反した上に局長加藤勇暗殺計画までたてているという御陵守護隊を一網打尽にする計画だった。それも、作戦を執行するのは当日の夜。伊織甲子太郎に看破されないためにギリギリまで依頼を遅らせていたという。

計画では、御陵守護隊を門出を祝うという名目で酒宴に招き、酒に酔った隊士たちを帰り道で襲撃するというもの。ホオヅキの冒険者たちには、御陵守護隊の実質的な首魁の伊織甲子太郎の首を獲ることが依頼された。この計画そのものに何か罫があるのではないかと訝るアリーヤ。待ちに待った伊織を斬る機会に昏い喜びを感じるミカゲ。しかし、ヘラは暗殺という手段をとることに納得が得られずに局長の勇の元に話を聞きに行く。

ヘラは勇からこの計画はより多くの人死にが出るのを防ぐためのものだと言われ、一方、ミカゲは前々から気がかりだった総司の健康状態を確認めに行ったのだが、総司から差し出されたチョコ大福の罫にかかり、診察に失敗してしまうのだった。

襲撃の予定時刻の夕刻までが過ぎ、冒険者たちは酒宴を避けて襲撃予定地点に埋伏する。

やがて、酒宴の帰り道で勇や歳三たちと共に甲子太郎たち御陵守護隊がさしかかったところで、離反して御陵守護隊に移ったはずの武藤一が居合の一閃を甲子太郎に浴びせたのを合図に襲撃が始まった。武藤一とフィーアは御陵守護隊に潜入した間者だった。甲子太郎に憎しみのこもった斬撃を浴びせるミカゲだが、甲子太郎の側近に阻まれてしまう。

手負いのまま脱出しようとする甲子太郎を追撃する冒険者たち。ヘラは霊体化して索敵をつとめ、アリーヤが的確な判断をする。ミヤコを追撃する道中で組長たちに会い、情報や力や暑苦しいお節介を貰いながら甲子園太郎を追い詰めることに成功した。

本光寺の門前で片膝をついている甲子太郎。その足元にはミカゲの斬撃から甲子太郎を庇った隊士の死体。既に命運は果たすと覚悟を決めた甲子太郎は、追手の冒険者たちを巻き添えに美しく散らそうと、手番を捨ててカウンターだけを狙う大上段に構える。アリーヤ、ヘラ、ミカゲの三人は鋭い反撃に苦しみぎりぎりまで消耗しながらもなんとか甲子太郎を倒すことができた。甲子太郎の死に際、三南がまだ生きていることを告げるミカゲ。『奸賊ばら！』と叫んで呪詛を投げつけ、甲子太郎は逝った。呪詛をまともに受けて重傷を負ったミカゲはアリーヤとヘラの手当てで一命を取り留めた。

伊織甲子太郎を倒した報告に戻った冒険者たちは勇から、もう一つの頼みごとをされる。それは、ある地点まで行ってほしいというものだった。道中で総司と歳三と遭遇した冒険者たちは、歳三から言外に工藤平助をうっかり逃がしてほしいと依頼される。移動先で見たものは新八に説得される平助の姿だった。

しばらくのやり取りの末に平助の説得は成功した。しかし、赤誠組を裏切った形になっている平助をこのまま隊に置いてはおけない。そこで、冒険者たちは安定の匿い先と化しているクロウの元に平助を託すのだった。

ミカゲは憎しみを洗い流して憑き物が落ちたかのようなようだったが、ヘラは無力感と悲しみとに苦しむのだった。

インターミッション(第五話(武士の誉れ)での状況説明)

御領守護隊を赤誠組が討った後も旧幕府軍(旧体制派)の勢力の失墜は止まらなかった。チョウシュウと同盟を組んで新政府軍(新体制派)に移ったサツマ藩の者たちはトートで放火や強盗など、旧幕府軍を挑発し武力闘争に発展させようと動きを見せる。旧幕府軍を束ねるヨシノブは平和裏に政権を移行させたいという意向だったが、周囲の幕臣たちはサッチョウ(サツマとチョウシュウ)討つべしと血気盛ん。戦争への流れは不可避なものとなっていた。現在、アイヅ藩を中心とした旧幕府軍とサッチョウを中心とした新政府軍が、キョウの都の市街地近くの鳥羽・伏見で開戦寸前の状態にまで発展していた。

なお、公儀御庭番衆烏忍軍は日和見の状態です勝った方につきそうな様子。

第五話 武士の誉れ(鳥羽・伏見の戦い)

参加PC:エルル、ヘラ、マサヨシ、ミカゲ

赤誠組ではなく、大和国天城家の宿老をつとめる紫苑(クロウの姉にあたる人)からの依頼で呼び出されたホオツキの冒険者たち。ワープポータルから出た先の大和国内も治安に関わる者たちは不穏な雰囲気。城で迎えられた冒険者たちは甘酒で饗応を受けながら依頼に関わる事情を聞かされた。(インターミッション参照)元々、大和国は中立の立場ではあった。しかし、御領守護隊残党によるとみられる赤誠組局長加藤勇暗殺未遂事件が発生し、加藤勇は命を取り留めたものの当分戦闘参加ができなくなった。これにより旧幕府軍の士気低下は免れない。天城家は旧幕府軍への表立っての支援はできないものの、ホオツキの冒険者に赤誠組の者たちを救ってほしいと依頼をした。赤誠組の不安はそれだけではなかった。以前から不穏だった総司はとうとう倒れ大阪城で療養しているという。

クロウのまとめた診断書を見ただけでは病状を認めることができない冒険者たちはまず大阪城に総司を見舞いに移動した。大坂城内は物々しい雰囲気。空気を読まずに総司の元に突撃した冒険者たちは、病に蝕まれ嗜血した跡のある総司と再会するのだった。有無を言わず総司を診察したミカゲは彼が肺結核で死を目前にしていることを認めざるを得なかった。ホオツキの医療技術を活かせばまだ助かるかもしれない。しかし、今すぐに総司を当座の生命の危機から救うために治療する必要がある。そこで、ヘラが薬物による治療を行い、エルルが赤い力で総司を治療し、総司の病状は小康を得ることができた。そして、冒険者たちは総司と別れて、旧幕府軍と新政府軍のにらみ合うキョウの都の近くまで移動するのだった。総司が密かに参陣しようとしているのにも気づかずに。

参陣した冒険者たちはフィーアの案内で赤誠組の本陣に参上した。そこでは片腕を吊った局長加藤勇と鬼の副長土坂歳三が作戦検討中だった。華麗な変身を遂げたエルルに驚いた勇と歳三だったが、さっそく冒険者たちは状況の説明を受けた。先の暗殺未遂事件で勇は銃撃を受け、弾は貫通したものの骨に損傷を受け当分は戦闘参加不能な状態。アイツ藩及び赤誠組を中心とした旧幕府軍は兵数15000で伏見奉行所を中心に鳥羽・伏見に布陣。一方の新政府軍は兵数が5000と小勢だが市内に布陣。戦闘は市街戦になる様相を呈している。市街戦では数の有利を活かしきれないことが考えられ何かの奇策により不利に転じることもあるだろう。戦闘では如何に士気を高く保つかにかかってくると予想された。敵は必ず策を弄してくると思われるが赤誠組としては小賢い策を弄すことができない立場。勇も歳三も正々堂々と戦うつもりだ。

本陣を辞した冒険者たちは、旧幕府軍の陣営での噂話を小耳に挟んだ。それは、新政府軍が錦の御旗を掲げているという事実だった。錦の御旗が本物であれば、それを持つ軍は官軍、それに対するは賊軍ということになってしまう。錦の御旗を見た旧幕府軍は士気が一気に低下し、逃亡・降伏・寝返りが発生したという。幕府への忠義を貫く覚悟のある者と錦の御旗を信じない(偽物だと思っている)者たちで、旧幕府軍はなんとか軍としての体裁を維持しているような状態だった。観察方が旧幕府軍内で情報操作をしているというが、鳥羽・伏見の戦いは翌日に迫っていた。

早朝、六番隊組長井口源三郎が歳三と密かに会話をして死亡フラグを立てた。朝食の場で食事の進まない若い隊士を励ましている源三郎のところに行ったエルルは先陣を務めるという源三郎に死ぬのを前提にしないようにと釘を刺した。歳をとった自分よりも若者たちの生命の方が重いと源三郎は言い逆にエルルを含めた若い隊士たちのことを心配した。

戦闘は新政府軍の砲撃から始まった。大方の予想通り、新政府軍は旧幕府軍を街中に誘い込んで障害物などを使って分断し撃破する戦法に出た。錦の御旗は敵陣の奥の方に上がっている。勇と歳三の計らいで第一陣から外され何かがあった際の予備兵力となった冒険者たち。ヘラファミリアとマサヨシの千里眼で敵陣深くに突出した源三郎が前線で孤立しつつあるのを発見。冒険者たちは急いで救援に向かった。迷路のような市街地の中で、徐々に旧幕府軍の戦力を削り取っていく新政府軍の漸減策を避けて、周囲からの流れ弾や待ち伏せに遭いながらも冒険者たちは源三郎のところへ駆けつけることができた。

戦場の奥で孤立する源三郎のところへ現れたのは冒険者たちだけではなかった。大阪城で療養していたはずの総司も他の隊の組長たちもそこに現れた。しかし、敵軍の中には開戦前に歳三から話を聞かされたサツマの人斬りが二人いた。

源三郎を救うためには人斬りを倒さなければならない。冒険者たちの前に人斬り新兵衛と少数の兵士たちが立ちふさがった。冒険者たちは新兵衛のカウンターで反撃を受けながらなんとか新兵衛を討ち取ることができたが、新兵衛の死に際に放った神技にも似た打ち下ろしでヘラが重傷を負ってしまった。新兵衛を失い、半次郎の意見を聞き、これ以上の作戦行動で被害を増やしたくないと判断した新政府軍の隊長は撤退を判断。半次郎も新兵衛の遺体を抱えて撤退し、冒険者たちは源三郎の救出に成功した。時は既に夕方近く。その場で体勢を整えていた一同は後方の本陣近くで爆発が起こったのを見て慌てて後退した。

本陣では新政府軍の砲撃で弾薬庫が爆発。火事を消火しきれない状況となり勇と歳三は戦場からの撤退を決意。赤誠組の主力は大阪城へと後退。冒険者たちは深手を負っている源三郎と病が重い総司、そして前線で兵士を庇って重傷を負った吉崎丞をはじめとした重症者たちを大和の国に送り届けるのだった。

第六話 流血のシナリオ(加藤勇救出作戦)

参加PC: インジェ、エルル、フリック、ミカゲ

今回も赤誠組からではなく、大和国の宿老紫苑からの依頼で呼び出されたホオヅキの冒険者たち。依頼内容は要人の救出とその要人の死の偽装と誰が救ったのかを看破されないこと。しかし、救うべき要人の名は明らかにされず依頼書の書き写しも許可されなかった。ホオヅキの冒険者たちは若干の不審を感じながら大和国へと向かった。

大和国では紫苑たち三姉妹から、フリックとインジェのために軽い状況説明があり、依頼について説明を受けた。救出する要人とは赤誠組の局長、加藤勇だった。鳥羽伏見での敗戦後三ヶ月、赤誠組は勇が新政府軍に捕らえられ、数も敗戦前の半分ほどに減り、トートの東の下総国付近に散り散りになって潜伏している状態だという。これまでの経緯から勇の処刑は間違いないものの、まだ生きてはいるらしい。勇が捕らえられているのはトート北西部の山岳地帯にある新政府軍の陣地。兵数は周辺に配置しているものも含めて約500ほど。鳥羽伏見で出会った半次郎はその陣中にはいないようだ。

冒険者たちは移動用の馬と馬車と変装用の衣装を借りて、勇が捕らえられているという山地に向かう。基本戦術をフリックの霧で有利な状況を作り上げ、混乱の中をエルルの幻術で勇の死を偽装しつつ救出、そのまま大和国に帰還するという段取りと決めた冒険者一行は件の山地へと到着する。

気象予測をすれば、早朝に山地一帯に霧がかかりそうなことが分かり、まずは偵察のために陣地へと近づいた。哨戒網をかいくぐり良さげな高台から陣地を一望。勇が捕らえられていそうな場所を探すと、見張りが立っている大型天幕一つと中型天幕五つが見つかった。大型天幕は本営だと判断した冒険者たち。陣地から聞こえてくる声から、この警戒は近くで人斬り以蔵の目撃情報があったため、以蔵に勇を斬らせないためだと分かった。以蔵は敵味方だけでなく一般人まで斬るような兇人(バーサーカー)として知られていた。以蔵をどうするかを漠然と考えながら偵察を終えた冒険者たちは一旦、山岳地帯に潜伏して自然の霧を使った早朝の襲撃に備えることとした。

早朝、霧の中を新政府軍陣地に潜入した冒険者たちは天幕を一つ一つ改めていき、四つめの天幕で勇を発見した。勇に助けに来たことを告げて縛を解く。表の見張り二人を隠密理に殺害して、体形が勇に近い見張りの身体に赤誠組の羽織と額当てを着せて暴行跡をつけ、エルルの幻術で首を勇に偽装することで、代わりに死体として仕立て上げた。そして、冒険者たちは手負いの勇を連れて陣地から脱出を図った。

山地からもう少しで下山し切るところで夜が明け霧も消えた時に、一行は人斬り以蔵の襲撃を受けた。同時に現れた新政府軍の兵を一刀のもとに全滅させた以蔵と冒険者は激しく戦い、冒険者はなんとか勝利した。以蔵の死体は崩壊して消失した。以蔵の遺した刀を調べると、実はバーサークじみた戦い方は、ただひたすらに力を追い求め鍛えられた妖刀による呪いのせいだと分かった。冒険者一行は、勇を大和国に送り届け、これ以上妖刀が人を殺さないようにと妖刀を海に沈めたのだった。

第七話 滅びゆくもの(会津征伐)

参加PC:ウィリアム、ゼラード、フリック、ミカゲ

またも大和国宿老の紫苑に呼び出された冒険者たち。船に届いた依頼内容は包囲された城からのある人物の救出だった。今回はこれまでと違い、城にも上がる事無く城下の甘味処に呼び出される。冒険者たちは密談ができる地下室に招き入れられ、紫苑から救出したい人物は新政府軍のアイヅ征伐に赤誠組から飛び出してアイヅ城にはいった三番隊組長武藤一(ハジメ)だと明かされる。赤誠組の残存戦力は北の西洋式要塞に向かっていて、赤誠組の後ろ盾になっていたアイヅ公の危機に黙っていられなかったハジメはアイヅ城にいたのだ。彼はクロウとも同門の縁が深い人物だが、この依頼はあくまでも姉からの依頼だと強調する紫苑の口ぶりが今回の依頼の極秘度を冒険者達に思い知らせる。紫苑はアイヅの協力者たちをまとめている旅籠の主人への合言葉を教えると冒険者達を送り出した。

今回の依頼の極秘度を感じた冒険者たちは城下の盗賊ギルドに寄って変装用の衣装とアイヅの情報を購入してから、紫苑が用意してくれていた馬車を使ってアイヅへと移動する。

アイヅで冒険者たちは旅籠の主人に合言葉を伝え、アイヅ城の置かれた状況と城への接近の手順及び脱出用のポイントを教えてもらい、主人からハジメに渡すようにとお守りを託された。次の日には大規模に展開した新政府軍のアイヅ城攻撃が開始されるタイミング。すぐに入城しないと間に合わないと察した冒険者たちはすぐに旅籠を出て主人に教えられた手順通りにアイヅ城に入った。

城に入るとすぐにハジメに会うことができ、冒険者たちは旅籠の主人に託されたお守りを渡した。それから冒険者達はアイヅ公に引き合わされる。二君に仕えないという武士としての本分と領民を思う気持ちの板挟みにあったアイヅ公。新政府側にはつかないが自分の首を差し出して戦争を止めようとしたアイヅ公だったが臣下や領民総出で止められ忠義を無碍にはできず開戦に踏み切ったという。しかも女子供まで戦の支度をしているとのこと。冒険者たちの援軍は心強いが危険と判断したらすぐにアイヅを離れるようにと彼は腰を低くして冒険者達に告げた。

翌日、戦端は開かれた。急峻な山になっている城の北側では戦闘が発生せず、南門を中心に東門と西門でも大規模な戦闘となった。南門に布陣した女子供で構成された朱雀隊が傷つくことを嫌ったウィリアムとゼラードは朱雀隊を後方に置いてハジメと共に新政府軍を相手に大暴れした。西門のフリックも東門のミカゲも同様に新政府軍に損害を与え、士気を保てなくなった新政府軍が撤退し初日の戦闘は早々に終了した。

その夜、ウィリアムは満足に戦闘に参加できず不満をためた朱雀隊と陰悪な雰囲気となりフリックとゼラードがフォローを入れた。ミカゲは他の兵士たちを治療し交流。ウィリアムはアイヅ公の覚悟を確かめにアイヅ公と会話をする。自分の命を後のアイヅのために捧げる覚悟と『二君に仕えず、それこそ誠の義、誠義である』という言葉でウィリアムは預かった。それからゼラードとミカゲは城の北側の防備が充分かを確かめに行き、城の北側は険しい山になっていてそう簡単には北からの攻撃はできないと判断。時を同じくして新政府軍からの夜襲が発生。ウィリアムとフリックが応戦するが大きな被害が出てしまった。新政府軍の夜襲はさらに続けて発生し、睡眠をとらざるを得なかったウィリアムとゼラードとミカゲが戦えずフリックが応戦する。夜間の二度の奇襲での被害は昼間の戦闘の倍以上となった。

翌日、連続した夜襲で新政府軍へのヘイトを溜めた冒険者たちは主に睡眠不足により完全とは言えない状態で戦場に立つ。それでも初日とあまり変わらない勢いで新政府兵を蹂躪していく冒険者たち。しかし、冒険者達と同じようにヘイトを溜めていたハジメが愛刀を絡め取られてしまったのを合図とするかのように戦況が傾き始めた。直後にアイヅ城に北側からの奇襲が加えられ城内が混乱に陥った。さらに三方の門を攻めていた新政府軍に後方から大量の増援が現れた。死兵と化した朱雀隊とアイヅの兵たちによって、冒険者たちとハジメは奇襲を受けた城内の対応に回される。一足先に城内に戻っていたハジメに奇襲の新政府兵が殺到し、ハジメは脇差も失い絶体絶命の危機を迎えた。そこに駆けつけたのは赤誠組を離れたはずの門倉新八と河田佐之助だった。周囲の新政府兵は倒したもののハジメは負傷し戦える身体ではなく、アイヅ落城は目前に迫っていた。冒険者たちは南門の側から森を抜けて脱出を試みる。

途中で新政府軍に脅されて城の北側の道を教えてしまった村人の話を盗み聞きしつつの逃避行だったが、脱出ポイントの直前で追撃部隊が追いついてきた。冒険者たちは傷つきながらも追撃部隊の隊長を討ち取り脱出に成功し、そのまま大和への帰還を果たした。大和では紫苑に出迎えられ冒険者たちはねぎらいを受けた。一方ハジメたち三人はそこで紫苑から死んだと思っていた仲間たちが実は生きていたことを聞かされ驚愕する。赤誠組の残存戦力は北方に向かっている。次が赤誠組の最後の決戦になるだろう。その時まで身体を休めるようにと紫苑は言うのであった。

第八話 熱誠(六稜郭の戦い)

参加PC:アリーヤ、エルル、ノエル、ミカゲ

いよいよ大詰め。依頼者は大和国藩主のクロウとなった。依頼内容は北方の僻地で戦っている旧幕府軍側に参加して大将と優秀な兵たちを生かして欲しいというもの。いつもの通り依頼者のことは秘匿するという条件が付加されていたが、この依頼には奇妙な内容が追加されていた。大将と兵を守るといふ依頼は一週間の区切りが付き、八日目にはもうひと仕事こなしてもらおうとのこと。

冒険者たちはさっそくアヅマは大和国へのポータルを使用して移動。そのまま城へと向かった。城主の間に通された冒険者たちは、依頼者のクロウと家老三姉妹以外は護衛も含めて完全に人払いされていることに気づく。家老三姉妹の長女シオンから状況の説明を受けた。旧幕府軍はトートから退去して北方の僻地である蝦夷地まで後退し、外国製の戦艦を手に入れ蝦夷地の制圧に成功。新政府軍は雪解けを待って蝦夷地に攻め込む体勢となっている。さらにクロウから詳しい依頼の話をした。一週間の戦いでは勝ちを狙う必要はなく優秀な兵を生かすことが主眼となる。そして、一週間後に何が起こるのかはまだ伝えることができないという。続いた質問で、旧幕府軍の兵を率いているのは土坂歳三であることと、前回の戦いでアイヅ城に残ったアイヅ公は生きてアイヅの寺に預けられていて折を見てトートに移送されること、これまでに大和国に送り届けた赤誠組の幹部たちはそれぞれに大和国で生活していること、外国製の戦艦を手に入れた旧幕府軍が蝦夷地周囲の制海権を握っていること、新政府軍の注意すべき人物として鳥羽・伏見の戦いにも現れた中田半次郎(啄木鳥)と新たに河村彦斎(抜刀斎)がいること、新政府軍は『六稜郭』と呼ばれる拠点に集合して抵抗していること、新政府軍以外の脅威は今のところないことなどが分かった。

依頼を受けた冒険者たちは馬車に揺られて移動した。馬車は途中で船に乗り、最後に上下左右に揺れる悪路を抜けて、三日で六稜郭の中に到着した。さっそく本営らしき天幕に向かう。誰何してくる兵士に名を告げて天幕に入ると、土坂歳三と十番隊隊士フィーアと、初めて顔を合わせる榎武揚(エノキ・タケアキ)が作戦図を前にしていた。顔合わせもそこそこに武揚が状況を説明する。鳥羽・伏見の戦いの頃に戦艦で海外から帰国した武揚は赤誠組のトートへの撤退から一緒に行動するようになった。アイヅ落城や加藤勇の処刑(公式には処刑されたことになっている)など状況の変化によりトートから退去を余儀なくされ、蝦夷地へと移動。そこで国際法の法典を根拠に蝦夷地に『蝦夷共和国』を建国宣言した。武揚はセレンと北帝国と南帝国からの援助を取り付けてあるという。しかし、数日前の大嵐により頼みの戦艦が沈み制海権が失われてしまったため、すぐにも新政府軍が侵攻してくることが想定されるという。

話はシームレスに作戦会議へと移った。旧幕府軍の兵力は千程度。想定される新政府軍の侵攻ルートは四つある。四つのルートのうち三つは拠点を死守することで防衛、残りの一つのルートで新政府軍に打撃を与える方針だという。冒険者にはその残った一つのルート『三股口』で新政府軍に打撃を与えることとなった。三股口は大軍を展開することが難しい隘路であり移動も撤退もしにくい地形となっている。しかし、損害を与えすぎると、新政府軍が三股口の攻略を放棄し他の三つのルートに全力を投入する可能性があるため丁度いい損害の与え方をする必要がある。

軽く打ち合わせをして、冒険者たちは三百の旧幕府兵と共に三股口へと布陣した。ノエルとアリーヤのドローンで戦場の地形を把握した。新政府軍に対する奇襲の方針として、敵の前方に奇襲をかけるリスクもリターンも低い方針・敵の後方に奇襲をかけるリスクもリターンも中程度の方針・敵の中列に奇襲をかけるリスクもリターンも高い方針が考えられた。冒険者たちは最もリスクの高い敵の中列への奇襲を選択した。旧幕府兵には合図とともに射撃をするよう打ち合わせをした。偵察兵によると新政府軍の軍勢約五百が油断しながら接近してくるという。

新政府軍に奇襲をかけた冒険者たち。五百の隊列の中にエルル・ノエル・ミカゲの三人が降下。アリーヤは崖上からの支援射撃を行う。戦闘は一方的なものだった。エルルのホワイトソードとアリーヤのショットガンとミカゲの三連撃と旧幕府兵の一斉射撃、そしてノエルのガン・カタコンボが圧倒的な手数と威力で新政府兵を薙ぎ倒していった。新政府兵からの攻撃もほとんど損害にはならず、損害を与えすぎないように反撃技を敢えて撃たなかった冒険者たち。一度の攻撃で三百人をゆうに超える損害を与えて冒険者たちはすぐに撤収する。ノエルは霧となり、エルルはレポートで撤収したことが新政府兵のパニックをさらにひどいものとした。新政府軍の三股口への攻勢はその後も何度かあったが、パニックに陥った新政府軍は除霊師を戦線に投入するなど迷走。他の拠点も有利に戦いを進め、三日間が経過した。幕府軍の残り兵力は九百程になっている。

三日目の夜、作戦の報告と打ち合わせをしている司令部に、新政府軍が四日目に兵力を大量動員してくるという報告が入った。四つの戦場では支えきれない。防御の方針は六稜郭への籠城となり拠点に散っていた兵力を撤収させることとなった。城で精液を求めて男漁りをするエルル。(失敗)

戦闘は籠城戦へと移行した。新政府兵は六稜郭の六つの口に対して均等に配置した、大筒・鉄砲・弓など射撃中心の兵科となっている。直接城を攻めている兵力は約三千。ドローンを飛ばして偵察をかけるアリーヤだったが敵の本営を発見することはできなかった。戦闘が開始されるとエルルは負傷兵の治療に回り、アリーヤが銃でミカゲが弓矢で指揮官を狙撃、ノエルがグレネードランチャーとライフルで敵の被害を拡大する。一方フィーアたち十番隊の隊士たちは城の外へと強行偵察をかけて敵の本営の位置を探っていた。籠城戦の初日(合計四日目)が終わり、戻っていた偵察隊はあまり成果が得られなかったらしい。次の日に同行したいと申し出る冒険者達だったが、偵察には統制の取れた行動が必要なため申し出を断られた。

籠城戦の二日目(合計五日目)の朝に偵察に出るフィアたちに何かあったときに位置を探れるようアリーヤがフィアに指輪を渡した。戦いは前日と同じような経過で進んでいったが、新政府軍側は前日の消耗を完全に埋めてきており兵力が全く減っていなかった。偵察から戻ってきたフィアによると敵の増援が船で続々と到着しているようだ。しかし本営の位置はまだわかっていない。次の日は海岸線まで足を伸ばすという。エルルの男漁りは失敗した。

籠城戦の三日目(合計六日目)。敵の兵はどんどん補充されていて消耗した様子はない。上空から敵陣の偵察をしていたアリーヤは森に伝令や負傷兵が出入りしているのを見つけた。負傷兵の治療をしていたエルルは兵たちが次々と戦えなくなっていくのを肌で感じる。そうして夜になると、動ける兵力は半分の五百ほどまで減らされていることが分かった。司令部では偵察から戻ったフィアが敵の増援が三千ほどいると報告をしていた。敵の本営の位置は分からないという。森は警戒が厳しすぎて情報がない状態では入れないとのこと。決め手になる情報がなく焦る歳三だったが、森の人の出入りを見ていたアリーヤの情報が決め手となる。フィアたち偵察隊は次の日の夜明け前に森の中への偵察を強行することとなった。そして、この夜にエルルの男漁りがようやく成功した。

籠城四日目(合計七日目)朝、冒険者たちは偵察隊を見送った。朝になり司令部に行くと武揚と歳三が偵察隊が戻ってこないという。アリーヤがサーチフェイバリットで指輪をもたせたフィアの位置を探り当てたところ、偵察に向かった森の少し南方の断崖近く。距離は六稜郭から5~6kmほどの位置のようだ。海と断崖と敵兵のイメージをアリーヤは感じ取った。その後すぐに重症を負った偵察兵の一人が戻ってきた。森の中で本陣を発見したものの撤退時に発見され断崖まで追い詰められ、なんとかひとり城へ報告に行けるだけの血路を開き戻ってきたらしい。すぐに少数の精鋭兵を編成して偵察隊を救出しに行くことになった。歳三をはじめとする30人ほどの精兵と冒険者たちがすぐに救援に向かう。

迎撃らしい迎撃も受けずに断崖へと到着すると偵察隊を断崖に追い詰めていた新政府兵を一蹴。偵察隊を確保した。偵察隊の中にはすぐに治療の必要な重症の兵もいて直ちに城に撤退することができない。重症の兵を治療しているうちに救出隊と偵察隊は圧倒的な数の敵兵に包囲されていた。これは城から兵をおびき寄せるための罠だったようだ。包囲を破る上手い策は出て来ない。歳三も強行突破を決意し絶望的な戦闘が開始された。血路を切り開きながらも消耗していく冒険者と精兵たち。既に日は西に傾き気力も体力も限界と思われたとき、状況が変化した。城と反対の方角から赤誠組の旗を掲げた援軍が新政府兵を蹴散らしながら接近してきた。その中でも一握りの兵たちが新政府兵を蹴散らしながら一直線に近づいてきた。それは公式には死んだとされていた勇や総司や三南たち赤誠組の隊長たちだった。到着した援軍に対抗しきれず新政府兵たちは撤退していった。

ノーウェンやミズキやセレスティアだけでなくクロウや紫苑たち三姉妹もいる援軍と合流した精兵たちはその場で野営することとなった。敵の大砲の弾は全て水浸しになったため砲撃される心配は無いらしい。援軍の実態は大和国の兵だったが表向きには赤誠組の残党兵ということになっているらしい。改めて赤誠組の死んだと思われていた幹部たちが実は生きていたことを知らされる歳三とフィアたち。ミカゲはこれまで歳三たちに真実を話していなかったことを土下座をして詫言った。それを受け入れる歳三。千草が改めて状況を説明する。新政府軍や旧幕府の上層部はこれ以上被害が拡大する前に戦争を早く終戦としたいが、蝦夷地に集まった新政府兵たちは旧幕府軍に恨みがある者たちや手柄が必要な者たちばかりで、朝廷から停戦の使者も派遣されているが今のままでは停戦ができない。決戦をせねば事が収まらないようだ。決戦での勝利条件は新政府側の中核の三人を倒すこと。

紫苑の全力甘やかして傷を癒やし気力を回復した冒険者たちは軍議の席に出た。クロウが状況を説明する。大和国の援軍と旧幕府軍を合わせると兵力が三千。対する新政府軍は一万五千。新政府軍の大砲は無力化されているので野戦で雌雄を決する事となる。練度の差により正面決戦をしても負けないという見積もりだが、兵力の損失を避けるためにクロウは策を用いるという。新政府軍の大將は武家のあまり優秀ではない長男であり、優秀な次男に実績で差をつけるために堂々と正面から幕府軍に勝とうと必ず横陣を敷くという。戦場の地形による制限もあり、これは間違いが無いとクロウの子飼いの精兵集団“陰狼衆”の諜報担当ミッドナイトが保証する。それに対抗するためにクロウは敢えて横陣を使うという。戦闘開始後まず中央が敵に押されたかのように軽く後退。自軍の左翼(ノーウェンたち)と右翼(ミズキとセレスティアたち)で敵の左翼と右翼を拘束。敵の押している余裕がある中央の予備隊を両翼に誘引し、中央が薄くなったところで、自軍中央の赤誠組精鋭集団で敵の中央に突入、自軍中央予備隊に配置したクロウ子飼いの“陰狼衆”で敵の中央にいる敵の中核である三人を孤立させ、その三人をホオヅキの冒険者たちが討ち取る。これがクロウが名付けた『逆さ魚鱗の計』という作戦計画だった。陰狼衆の長マドロックとの顔合わせもしたところで軍議が散会となった。

軍議散会後の自由時間にミカゲは三南敬助を赤誠組の宴会から呼び出した。思い出話や近況などから話し始める二人。三南がたくさんの業を積み重ねた自分が幸せになることが許せないと言うが、ミカゲはそれでも明里と幸せになって欲しいと言う。そしてミカゲは三南に一度だけ抱きしめてもらうことで自分の叶わなかった恋に区切りをつけるのだった。

エルルはミッドナイトやマドロックたちの宴会に混ざりに行った。そこで軍議で目をつけていたイケメンのミッドナイトに甘い言葉をかけられてすっかり良い雰囲気になり、エルルが酔ったような仕草をすると二人だけで天幕に入り閨事に及んだ。閨事の間何か情報を引き出されたようだが……。翌朝にエルルが起きると彼はおらず黄色いタンポポの花が置かれていたらしい。

アリーヤとノエルはさっさと寝たようだ。

翌朝。両軍がそれぞれに布陣した。中央予備隊の冒険者達はクロウの切り札の戦力“陰狼衆”と同じ位置につく。“陰狼衆”は50人のフルプレートの戦士たちと50人の忍びたちからなる部隊のようで、武器は統一されていないが全員が黒い装備で統一されていた。部隊長のマドロックと軽い打ち合わせをする。そうしているうちに銅鑼が鳴り開戦した。ノエルがドローンを飛ばして全体の戦況を把握する。作戦は中央の部隊が軽く退き両翼の部隊が敵を拘束するところまでは軍議通りで順調だった。しかし、新政府軍の両翼の戦力が厚く、中央の予備隊が両翼の支援に動く動きが中々発生せず次の段階に進まない。しびれを切らした冒険者たちが作戦に介入しようとするがマドロックに窘められる。焦る冒険者達だが、やがて敵中央の予備隊が両翼に動き、敵中央が薄くなった。ここでようやく**作戦が進み自軍中央の部隊が反撃に移り、“陰狼衆”と冒険者たちが動く時が来た。“陰狼衆”は敵中央に突入し、ターゲットの三人を孤立させることに成功。冒険者たちが闘う番が来た。**冒険者たちは“啄木鳥”中田半次郎と“抜刀齋”河村彦齋と敵の大將である平凡太郎と対峙する。虚勢を張る平。三人を孤立させたことに感服している半次郎。平常心を貫く彦齋。そして**死合が始まった。ミカゲは最初から燕墮として彦齋に斬りかかるも斬撃は浅く彦齋を止めることができない。アリーヤは上空に飛ばしたドローンを併用した射撃で彦齋を撃ち抜く。彦齋は狭い戦場を縦横に駆け回り居合斬りでアリーヤを狙うが、アリーヤは銃剣で切り払う。ノエルは全力のガン・カタコンボで半次郎を追い詰めるが、常人なら簡単に屠ってしまうガン・カタコンボを半次郎は独自の構えで耐えきった。エルルはテレポートで半次郎に組み付き斬撃を封じる。平は戦いについていくことができない。ノエルのガン・カタコンボでそれなりに大きなダメージを受けた半次郎は本気の殺意を解き放ち、エルルとミカゲが間合いを離された。ノエルは戦場をまとめて爆破しようと火薬をばら撒き始める。アリーヤはテレポートでミカゲの近くまで移動し、彦齋をミカゲの間合いにおびき寄せる。アリーヤを狙う彦齋は難なくアリーヤに追いつき超高速の抜刀術を放ったが、ファイサリス船長の言葉を思い出したアリーヤはライフルをカタールに持ち替えてパリィ。さらにアリーヤは反撃を放つが彦齋はこれを回避。待ち構えていたミカゲは彦齋に連撃を放った。ミカゲの斬撃を読んでいた彦齋は斬撃をかわすが、そこにミカゲが苦し紛れの燕返しを入れ、これが彦齋に深傷を負わせた。半次郎は独自の構えからノエルに対して“啄木鳥”の異名の元となった超高速の刺突を放った。しかし、ノエルは繰り出される刺突の一つ一つを躲しきり華麗なポージングで決めてみせた。エルルは火薬の爆発に備えて半次郎の方向へと移動。ここでノエルの火薬が大爆発。平が首だけ残して散り、彦齋も致命傷を負った。死の間際に居合の高みの境地に至った彦齋はノエルに対し必殺の抜刀術を放った。しかし、神速の抜刀術は護符に阻まれノエルの首には届かない。死合の初めからほとんど全開で戦ってきたノエルとミカゲは消耗が大きい。ミカゲは半次郎に突進し長刀の連撃と阿修羅刀の一撃のコンボを放ち半次郎に致命傷を負わせた。しかし、致命傷を負ったはずの半次郎は意地だけで立ち続ける。ノエルがガン・カタのコンボを叩き込むがそれでも倒れない。意地で再びミカゲに超高速の刺突を放った。消耗しきっていたミカゲだったがバックステップが間に合い射程外に逃れた。半次郎の死んでなお鋭い刺突に感嘆したミカゲ。半次郎も力尽きて**死合が終わった。****

主要な三人を討ち取って勝利宣言をすると新政府軍の戦線は崩壊。事実上最後の戦は終わった。ミカゲは半次郎と彦齋の供養をした。二人の魂は穢れもなく純粹だった。そこに朝廷からの停戦使節が登場し双方に軍を引くように言い渡した。それからすぐに停戦交渉の場が持たれた。新政府軍の代表は爆死した平の優秀な弟だった。弟は兄の非礼を詫げる。朝廷の裁定は両軍の軍備を解体して元の所属に戻すという内容だった。赤誠組については全員極刑となるところだったが、ひとまず極刑は執行せず大和国のクロウが身柄を預かることとなった。

赤誠組としての戦いが終わり、ミカゲは歳三にひとまずの挨拶に行く。歳三は赤誠組の隊士たちの世話を焼くつもりだという。困ったことがあったら頼るように歳三に告げてひとまずの別れとなった。